

セラピストの臨床実践能力とその発達過程に関する検討 —情動調律性に焦点を当てて—

目白大学大学院心理学研究科 青柳 宏亮
目白大学人間学部 沢崎 達夫

【要 約】

本研究では、セラピストの情動調律性に対する臨床経験年数やよって立つ臨床心理学的理論の影響について、アンケートを行い検討した。結果は、以下の通りである。

- (1) セラピストの情動調律性について因子分析を行った結果、「解説」因子、「共有」因子、「同調」因子の3つの因子が抽出された。
- (2) 臨床経験年数が6年以上10年未満の群から、情動調律性が上昇を示す。
- (3) 「解説」因子は、臨床経験10年まで線型的に上昇を示す。
- (4) 「共有」因子は、臨床経験2年以上6年未満の群で上昇を示した後、6年以上10年未満の群で有意に得点が下降し、経験年数を経るごとにゆるやかに上昇を示す。
- (5) 「同調」因子は、臨床経験6年以上10年未満の群から上昇を示す。
- (6) いずれの因子においても、臨床理論にかかわりなく、臨床経験年数がセラピストの情動調律性に効果をおよぼしている。

以上の結果を踏まえ、セラピストの情動調律性と共感性の差異、情動調律性に対する経験年数およびよって立つ理論の効果について考察し、今後の研究課題について述べた。

キーワード：臨床実践能力、臨床経験年数、臨床心理学的理論、発達過程、情動調律

はじめに

カウンセリングや心理療法が展開される心理臨床場面は、セラピスト（以下、Th.という）とクライアント（以下、Cl.という）の対面でのコミュニケーションによって成立する相互交流場面である。そこには、言語的な交流と同時に非言語的な交流が生起しており、その重要性に関する指摘は枚挙にいとまがない。たとえば、Neely（1992）は、カウンセリングにおける非言語的交流の重要性について、感情の93%が音声・表情・態度などの非言語的要素で説明されるとする Mehrabian の説に依っている。神田橋（1997）も同様に、「関わりの中核は非言語的な水準であり、言葉は枝葉部分」と指摘している。こう考えると、Th.の非言語的要素の読み取り能力や活用は、心理臨床の過程やTh.の実践能

力を押し量る上で重要なトピックになり得るのではないだろうか。

このことを議論する際、臨床実践の積み重ねがTh.の臨床実践能力にどのような影響を与えるのかを明らかにすることは、実際的にも理論的にも重要であると考えられる。Auerback & Johnson（1977）は、実際的な面から、臨床実践の積み重ねによる変化の過程を明らかにすることで、望ましい変化を効果的に促進することが可能になるかもしれない点を挙げており、この問題については近年に至るまで検討がなされてきている（例えば、Fiedler, 1950；Strupp, 1955；Wogan & Norcross, 1985；増田, 1992；武島・杉若・西村・山本・上里, 1993；鈴木, 1995；内海・小田, 1998など）。さらに、理論的な面から、Th.の臨床実践能力の発達過程の

中に含まれる各学派共通の非特異的な部分を見出す可能性が挙げられている (Auerback & Johnson, 1977)。鈴木 (1995)・新保 (2004) は、Th. の臨床実践能力は、臨床経験年数のみで単純に予測できるものではなく、よって立つ臨床心理学的理論や学派の違いといった Th. のタイプや立場も重要な要因であることを示唆している。よって、Th. の臨床実践の積み重ね (臨床経験年数) だけでなく、Th. よって立つ臨床心理学的理論の影響も検討することで、より詳細に臨床実践能力を検討できると考えられる。これまでの Th. の臨床実践能力に関する研究の対象は、技法や理論の習得度合い、アセスメント能力、ケースワークの方法などが多く、臨床実践の中での Th. の非言語的要素の読み取りや理解、活用といった側面は扱われていない。よって、心理臨床経験年数によって非言語的要素への注目度に差があるのか、Th. がよって立つ臨床心理学的理論によって非言語的要素への注目度に差があるのか、また非言語的要素への注目度は、臨床実践初期から以上変化しないのか、持続的に変化するのか、長い経験を経た後に変化し始めるのかを明らかにすることは、臨床実践の学習過程を考える上で、有用な情報になると考えられる。

心理臨床における非言語的相互交流について検討する際に、言語以前の交流を行っている乳幼児に関する研究は、ひとつの枠組みを提供してくれる。そこで本研究では、Th. の臨床実践能力の理論的枠組みとして、Stern (1985) の「情動調律 (affect attunement)」を主とする Th. - Cl. 間に生起する非言語相互交流を取り上げる。Stern (2004) は、相対する人と人との間で生じる体験の中で、言語化されにくい体験を意味あるものとして治療的に活用しようとする姿勢を打ち出し、心理臨床における非言語的な次元からのアプローチの発展をもたらした。そこでの鍵概念が、「情動調律」であり、“他者の内的状態の行動による表現型をそのまま模倣することなしに、共有された感情状態がどんな性質のものかを表現する行動” (Stern, 1985) によって、その場のかかわり合いの背後にある内的感情状態を共有するための経路を創造するとした。これは、心理臨床のプロセスにおいて、

Th. が Cl. の主観的体験を共有するために、Cl. の内的状態に合わせるようなかわりをするのと同様に、Th. が Cl. のそのままの情動状態を細やかに読み取り、そしてそこに参加し、その状態を共有しようとする姿勢に置き換えることができる (森, 2010)。本研究では、Th. の情動調律の特徴について、瞬間瞬間に起こる二者間でのコミュニケーションの調整機能モデル (Sander, 1995; Beebe & Lachmann, 2002 富樫監訳 2008) を参考にして、① Cl. の状態の解釈 (Cl. の内的状態に関心を寄せ、その内的状態を汲み取ること)、② 内的状態の共有 (Cl. の内定状態を明確化し、それに自己の状態をチューニングさせ応答の準備性を整えること)、③ 応答 (明確化された Cl. の内的状態に合わせて自己の表現や行動を調整すること) という 3 段階のプロセスを想定して検討を試みる。

ところで、情動調律の特徴を明らかにする際、Th. にとって欠かせない実践能力として位置づけられている共感 (empathy) との接点を検討することは有用であると考えられる。情動調律と共感は、早期母子関係をはじめとした乳児と養育者との関係を原点にしている (牛津, 2010)。心理的現象としての共感 (empathy) は、「対人関係において一方が他方の内的世界 (感情、情緒の動き、考えなど) をあたかも自分のものであるかのように感じること」とされ、Rogers (1957) が、カウンセリングにおける Th. と Cl. との対応関係のプロセスで活用したことはよく知られている。Buie (1981) は、共感を、(1) Cl. の経験的認識に力点を置く概念的共感、(2) Th. が経験する臆気な記憶や感情及び連想から生じる自らの経験的共感、(3) Cl. の内的世界についての想像的で模倣的などとりとめない形をとる共感、(4) 情緒的に共鳴し合う感化力をもつ共感、という 4 つの特性に分類しているが、ここにも情動調律との類似性がうかがわれる。弘中 (2008) は、遊戯療法において、子どもの情動や発声・身体運動に対する Th. の情動調律的なコミュニケーションの根底にある、子どもの意図・期待を敏感に察知した共感的な反応の重要性を指摘している。

本研究では、Cl. の情動 (情緒) を理解する過程において、Th. が知覚する Cl. の非言語的行動

やTh.が面接中に行う非言語的行動を臨床実践能力と定義した上で、その指標として「Th.の情動調律性」を取り上げる。「Th.の情動調律性」を、Th.がCl.の行動からCl.の感情状態を感じとり、その感情状態に合わせた反応をしていく能力と操作的に定義し、多様なTh.を対象として個々の心理臨床に関する調査を行い、Th.の情動調律性に対する経験年数の影響について検討を行う。これによって、臨床実践能力の発達と非言語的相互交流の活用について示唆を得ることを目的とする。本研究の初心者群と熟練者群の枠組みは、先行研究（増田，1992；武島・杉若・西村・山本・上里，1993；鈴木，1995；内海・小田，1998など）において臨床経験年数による実践能力の差異が見出されていることから、それらを参考にした経験年数による区分を用いる。さらに、Th.のよって立つ主な臨床心理学的理論（以下、主理論という）の影響も分析対象とし、それらによる経験年数の効果の違いについても検討を加える。以上を踏まえ、本研究の流れは以下の通りである。Th.の臨床実践能力の指標のひとつとして想定される「Th.の情動調律性」を測定するための尺度作成を行い、その特徴を共感性との接点から吟味する（研究1）、得られた尺度を用いてTh.の情動調律性に対する臨床経験年数及び主理論の効果の検討を行う（研究2）。

〔研究1〕「セラピストの情動調律性尺度」の作成とその特徴の検討

作成手続き Th.の情動調律性を測定するために、「Th.の情動調律性尺度」の作成を行った。フェイス項目として、年齢、性別、臨床経験年数、主な心理臨床領域、主として用いる技法・理論の5項目を設定した。Th.の情動調律性の項目内容について、本研究における情動調律の定義と前述の3段階のプロセスを踏まえ、Th.がCl.の意図や感情状態を非言語的に読み取ることを示す「解説」因子、Th.が言葉によらずCl.の感情に共鳴しようとすることを示す「共有」因子、Th.がCl.の感情状態に合わせた非言語的行動や反応をすることを示す「応答」因子の3因子を想定した。また、継続的に心理臨床実践を行っている10名のTh.（臨床経験年数

5年～10年）に対し、インタビュー形式を用いて、面接におけるCl.の非言語的要素の読み取りや自身の非言語的な反応についての体験を収集した。これらと既存の各尺度内容を参考にしながら、筆者等3名で協議を行い、項目内容を選定した。

「解説」因子については、自らが相手を理解しようと関与していく能動的な感受性を測定するノンバーバル感受性尺度（和田，1992）から1項目、他者への関心の方向性を測定する他者関心度尺度（三原，1998）から1項目、共感性プロセス尺度（葉山・植村・萩原，2008）の他者感情への敏感性因子から1項目、その他インタビューから得られたTh.の体験を項目化し追加した（7項目）。「共有」因子については、共感性プロセス尺度（葉山他，2008）から5項目、ノンバーバル感受性尺度（和田，1992）から1項目、その他インタビューから得られたTh.の体験を項目化し追加した（7項目）。「同調」因子については、Sternによる情動調律の一般的特性である、タイミングやリズム、形式を含む応答を参考に、Th.の反応を項目化したものと、インタビューから得られたTh.の体験を項目化したものを用いた（9項目）。質問は全23項目であり、日々の心理臨床実践におけるCl.との面接場面を思い浮かべたときに各項目をどの程度体験しているかを問い、「全くあてはまらない」（1）～「よくあてはまる」（5）の5件法で自己評価する形式とした。なお、心理臨床場面におけるTh.の非言語的なCl.理解の程度を測定していることを明確にするために適宜、項目の表現に改変を加えた。

「Th.の情動調律性尺度」の特徴を検討するために、本研究において情動調律性と近似した概念として想定した共感性を多面的・多次的に測定する多次元共感性尺度（MES）（鈴木・木野，2008）を同時に実施した。

調査の実施 2017年6月から7月にかけて調査を実施された。調査対象は、臨床実践領域を限定せず心理臨床を連続的に実践しているTh.とした。調査用紙の配布・回収は、対象者が参加している研究会や勉強会に出向いて行った。そこからさらに、その対象者らが所属する

機関や施設の同僚に調査協力を依頼し、郵送にて配布・回収を行った。

倫理的配慮 調査は無記名で実施された。調査協力への同意は自由意思であり強制性はなく、同意しなくとも不利益が生じることがないことを口頭及び紙面で説明し、調査用紙への回答をもって研究協力への同意を意思表示するよう求めた。

分析方法 調査への回答が得られた102名（男性52名、女性50名；平均年齢34.53, $SD=4.35$ ）を分析の対象とした。臨床経験年数の区分設定は、大学院での訓練を修了し現場での臨床実践を始めていく初心者の群（2年以上6年未満）、臨床実践中期の群（6年以上10年未満）、臨床実践長期の群（10年以上）とした。群ごとの分析対象者は、2年以上6年未満43名、6年以上10年未満43名、10年以上16名であった。Th.の

情動調律性尺度および多次元共感性尺度の項目について因子分析を行い、因子構造を検討した後、各尺度の下位因子ごとの相関係数を算出した。

結果 Th.の情動調律性尺度23項目に対して最尤法による因子分析を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から3因子解を採用し、再度、最尤法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.30に満たない2項目を削除し再分析を行ったところ、2項目が2つの因子に.30以上の負荷量を示した。これら2項目を除き、19項目で再度同様の因子分析を行った。最終的な因子分析結果をTable 1に示す。

第1因子は、「面接中にCl.の発話の速さや抑揚と同調することがある」、「面接中にCl.と波長が合う感じを体験したことがある」といった項目で因子負荷量が高く、Th.とCl.の一体感を

Table 1 Th.の情動調律性尺度の因子分析結果（最尤法・Promax回転）

	因子		
	I	II	III
第1因子：同調 ($\alpha = .93$)			
面接中にCl.の発話の速さや抑揚と同調することがある	0.82	-0.01	-0.07
面接中に、Cl.と波長が合う感じを体験したことがある	0.80	0.02	-0.11
自分が考えたことを言葉にする前に、Cl.にそれが伝わった経験がある	0.78	-0.08	0.25
Cl.の声の調子に合わせて、自分の調子を調整している	0.77	-0.06	0.03
面接中に、Cl.と動作が一致することがある	0.72	0.00	0.10
面接中にCl.と態度や行動が同調する感覚をもったことがある	0.71	0.08	-0.09
面接中に意図せず、Cl.と同じような行動をとっているときがある	0.71	0.07	-0.03
面接中にCl.と呼吸のリズムが同調することがある	0.71	0.09	-0.01
Cl.の表現にタイミングよく応答している	0.63	0.20	-0.04
第2因子：解釈 ($\alpha = .92$)			
Cl.の非言語的な行動からCl.の考えていることがなんとなくわかる	-0.17	0.94	-0.10
Cl.の態度から、Cl.の表現を読み取ろうとしている	0.15	0.78	0.03
初めて会ったその時点で、私はそのCl.の性格特徴をだいたい把握できる	0.11	0.76	0.02
Cl.の態度や表情を気をつけてみるようにしている	0.12	0.73	0.01
Cl.が自分の感情などを言葉にする前に、Cl.の態度からそれらをだいたい把握できる	-0.05	0.72	0.15
Cl.のちょっとした表情の変化に気がつくほうだ	0.18	0.68	-0.01
Cl.の表情や仕草から、Cl.の感情や状態がわかる	0.07	0.64	0.00
第3因子：共有 ($\alpha = .72$)			
悲しんでいるCl.と一緒にいると、その悲しみを自分のことのように感じる	-0.19	0.12	0.80
Cl.がうれしそうにしているのを見ただけで、自分もうれしくなる	0.03	-0.03	0.62
Cl.の何気ない行動の意味を理解できる	0.28	-0.12	0.42
	因子間相関		
	I	-	.69
	II		-.50

感じと態度と考えられるため、「同調」因子と命名した。第2因子は、「Cl.の非言語的な行動からCl.の考えていることがなんとなくわかる」、「Cl.の態度から、Cl.の表現を読み取ろうとしている」など、Cl.の感情や状態をTh.が読み取ろうとする態度を示していることから、「解読」因子と命名した。また、第3因子は、「悲しんでいるCl.と一緒にいると、その悲しみが自分のことのように感じる」、「Cl.がうれしそうにしているのを見ただけで、自分もうれしくなる」といった、Th.がCl.の感情や状態を分かち合おうとする態度を表してことから「共有」因子と命名した。 α 係数は、Table1に示す通りであり、十分な値が得られた。下位尺度間相関は、互いに有意な生の相関を示した (Table2)。

多次元共感性尺度23項目に対し、鈴木・木野 (2008) に倣って、因子数を5に固定した因子分析 (最尤法・Promax回転) を行ったところ、すべての項目が鈴木・木野 (2008) が想定した下位概念に対応する形で収束した。2つの因子に.30以上の負荷量を示した2項目、および第5因子「想像性」の α 係数が.50に満たなかったため第5因子に含まれる4項目の計6項目を削除し、17項目で再度同様の因子分析を行った。最終的な因子分析結果と α 係数をTable3に示す。

「Th.の情動調律性尺度」の特徴を把握するために、Th.の情動調律性尺度とMESの各下位尺度間相関を算出した (Table4)。その結果、すべての下位尺度得点間で有意な相関が見られなかった。

考察 本研究の理論的枠組みから、Th.の情動調律性と共感性は近似の概念であることを前提に質問紙を作成したが、調査の結果から、それらは別々の概念としてTh.に認識されていることが示唆された。

Stolorow, Brandchaft, & Atwood (1987 丸田訳 1995) は、患者の主観を理解しようとする際の検索方法としての共感と、治療者として患者に接する態度とを区別し、前者を共感、後者を情動調律とした。また、Orange (2002) は、Th.がCl.の情動表現に調律し応答することを、「情緒的応答性 affective availability」という用語で説明し、それが共感に至る準備性を高めると指摘している。カウンセリングや心理療法の訓練について考えたときに、理論や技法を習得することだけではなく、Th.自身の感受性や想像力といった能力を訓練することが重要である (葛西, 2005, 2006)。山下 (1994) は、Cl.からの非言語レベルでの影響をうけるということこそ感受性といえ、それによって自分自身がどのように触発・喚起されたかを理解する大切さを指摘している。実際、ロンドンのタビストック・クリニック (Tavistock Clinic) では、精神分析派心理療法師の感受性訓練を目的として、「乳幼児観察」が、1946年から現在に至るまで続けられており、非言語的コミュニケーションへの調律をその意義のひとつとしてあげている (Convington, 1991)。

以上から、「Th.の情動調律性」とは、Cl.の非言語的情緒表現に対して、Th.が全感覚を使って非言語的コミュニケーションへの調律を図っていく能力を指し、共感という現象に至る過程でのCl.の内的状態を受け取るための感受機能を担っていると想定された。

〔研究2〕Th.の情動調律性に対する臨床経験年数及び主理論の効果の検討

調査の実施 予備調査と同様の手続きをとり、2017年7月下旬から8月下旬に実施された。なお、調査用紙のフェイス項目で、年齢、性別についての項目は研究1と同様であるが、Th.の臨床的スタンスをより明確にするために、力動

Table 2 Th.の情動調律性の下位尺度間相関, 平均値, SD

	解読	共有	同調	M	SD
解読	-	.45***	.62***	3.46	0.86
共有		-	.39***	3.56	0.81
同調			-	2.94	1.11

*** $p < .001$

Table 3 多次元共感性尺度 (MES) の因子分析結果 (最尤法・Promax回転)

	因子				
	I	II	III	IV	
第1因子：視点取得 ($\alpha = .92$)					
常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている	0.90	-0.02	0.00	0.03	
人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く	0.89	-0.06	0.03	0.02	
人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする	0.87	-0.01	0.00	-0.06	
自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする	0.80	0.00	0.00	0.04	
相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない [R]	0.73	0.09	-0.05	-0.03	
第2因子：被影響性 ($\alpha = .86$)					
自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい	0.08	0.94	0.08	0.00	
物事を、まわりの人の影響を受けずに自分一人で決めるのが苦手だ	-0.07	0.78	0.08	0.16	
他人の感情に流されてしまうことはない [R]	-0.01	0.77	-0.04	-0.05	
まわりの人がそうだとすれば、自分もそうだと思えてくる	-0.01	0.64	-0.10	-0.14	
第3因子：自己指向的反応 ($\alpha = .75$)					
他人の成功を素直に喜べないことがある	-0.01	-0.14	0.88	-0.07	
苦しい立場に追い込まれた人を見ると、それが自分の身に起こったことでなくてよかったと心の中で思う	0.00	0.12	0.65	-0.06	
他人の成功を見聞きしているうちに、焦りを感じる人が多い	-0.02	0.02	0.61	0.08	
第4因子：他者指向的反応 ($\alpha = .65$)					
悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたいくなる	0.02	0.06	0.00	0.64	
まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといいなあとと思う	-0.02	-0.03	0.16	0.60	
悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない [R]	-0.13	-0.04	-0.11	0.48	
他人が失敗しても同情することはない [R]	0.00	-0.05	-0.13	0.47	
人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる	0.17	-0.01	0.01	0.46	
	因子間相関	I	II	III	IV
	I	-	.02	-.16	.20
	II		-	-.07	.11
	III			-	-.12

N=102 [R]: 逆転項目

Tabel 4 セラピストの情動調律性尺度と多次元共感性尺度の下位尺度間相関

	視点取得	被影響性	自己指向的反応	他者指向的反応
解読	.02	.16	-.03	.03
共有	.10	.15	-.10	-.08
同調	.02	.10	-.11	-.01

N=102

の心理学系、人間性心理学系、認知・行動理論系、その他の4項目から主理論を選択してもらう方式に改変した。また、本研究の目的である心理臨床経験年数の多様さに着目するために、初心者から熟練者への調査実施を考慮して、臨床経験年数の区分設定を、訓練生である大学院生の群(臨床経験2年未満)、訓練を修了し現場での臨床実践を始めていく初心者の群(2年以上6年未満)、臨床実践中期の群(6年以上10年未満)、臨床実践長期の群(10年以上20年未満)、ベテランの群(20年以上)とした。

倫理的配慮 調査は無記名で実施された。調査

協力への任意性について口頭及び紙面で説明し、調査用紙への回答をもって研究協力への同意を意思表示するよう求めた。

分析方法 調査への回答が得られた133名(男性58名、女性75名;平均年齢35.59, $SD=8.12$)を分析対象とした。臨床経験年数と主理論のクロス表を、Table5に示した。Th.の情動調律性尺度の項目について、因子分析を行い因子構造の確認を行った。臨床経験年数によるTh.の情動調律性の効果について検討するために、5群の尺度得点と各下位尺度得点の比較に1要因分散分析と多重比較(Tukey法)を用いた。さら

に、Th.の情動調律性に対する臨床経験年数と主理論の効果の差異について検討するために、経験年数×主理論の2要因分散分析を行った。下位検定には、多重比較(Tukey法)を用いた。この際、分析可能な対象者に偏りが生じていること、また訓練を終え実際の現場で臨床実践を行っているTh.を対象とすることを考慮し、臨床経験年数が2年以上6年未満の群(初心者群)、6年以上10年未満の群(中期群)、10年以上の群(長期群)の3群に分け、主理論については選択の多い力動的心理学系、人間性心理学

系、認知・行動理論系の3つに限り、経験年数(3)×主理論(3)の2要因分散分析を行った。

結果

1) Th.の情動調律性尺度の因子分析結果 19項目に対して、研究1で得られた結果をもとに因子数を3に固定して、確認的因子分析(最尤法・Promax回転)を行ったところ、すべての項目が想定した下位因子に対応する形で収束し、 α 係数も十分な値が得られた(Table6)。したがって、尺度得点及び下位尺度得点は、項

Table 5 臨床経験年数とよって立つ理論のクロス表

		理論				合計
		力動的心理学系	人間性心理学系	認知・行動理論系	その他	
臨床経験年数	2年未満	11	5	12	0	28
	2年以上6年未満	12	10	6	3	31
	6年以上10年未満	20	12	8	1	41
	10年以上20年未満	11	6	7	0	24
	20年以上	2	3	4	0	9
	合計	56	36	37	4	133

Table 6 セラピストの情動調律性尺度の因子分析結果(最尤法・Promax回転)

	因子			
	I	II	III	
第1因子：同調 ($\alpha = .93$)				
面接中にCl.と態度や行動が同調する感覚をもったことがある	0.89	-0.02	-0.05	
面接中にCl.と呼吸のリズムが同調することがある	0.83	-0.01	0.03	
Cl.の声の調子に合わせて、自分の調子を調整している	0.81	-0.03	0.03	
Cl.の表現にタイミングよく応答している	0.77	0.04	-0.02	
面接中にCl.の発話の速さや抑揚と同調する感覚をもったことがある	0.75	0.04	-0.01	
面接中に、Cl.と波長が合う感じを体験したことがある	0.73	0.01	0.02	
面接中にCl.と動作が一致することがある	0.71	-0.01	-0.01	
面接中に意図せず、Cl.と同じような行動をとっているときがある	0.71	0.06	-0.01	
自分が考えていたことを言葉にする前に、Cl.にそれが伝わった経験がある	0.65	0.03	0.04	
第2因子：解説 ($\alpha = .90$)				
Cl.の態度や仕草から、Cl.の表現を読み取ろうとしている	-0.06	0.94	-0.04	
Cl.が自分の感情や考えを言葉にする前に、Cl.の態度からそれらをだいたい把握できる	0.03	0.89	0.00	
初めて会ったその時点で、私はそのCl.の性格特徴をだいたい把握できる	-0.02	0.76	0.03	
Cl.の表情や仕草から、Cl.の感情や状態がわかる	0.01	0.74	0.04	
Cl.の非言語的な行動からCl.の考えていることがなんとなくわかる	0.03	0.72	0.00	
Cl.のちょっとした表情の変化に気がつくほうだ	0.06	0.68	-0.05	
Cl.の態度や表情を、気をつけてみるようにしている	0.08	0.65	0.02	
第3因子：共有 ($\alpha = .79$)				
Cl.がうれしそうにしているのを見ただけで、自分もうれしくなる	0.01	-0.08	0.82	
悲しんでいるCl.と一緒にいると、その悲しみを自分のことのように感じる	0.02	-0.03	0.72	
Cl.の何気ない行動の意味を理解できる	-0.23	0.14	0.54	
	因子間相関	I	II	III
	I	-	.61	.40
	II		-	.46

目得点を単純加算した値とし、その平均得点をTh.の情動調律性の指標として以後の分析に用いることとした。

2) 経験年数によるTh.の情動調律性の効果

臨床経験年数ごとの尺度得点の平均値を比較した結果、群間で有意な差が認められた (Table7)。多重比較を行ったところ、20年以上の群が、2年未満、2年以上6年未満、6年以上10年未満の群よりも得点が高かった ($p < .05$)。また、10年以上20年未満の群が、2年未満、2年以上6年未満の群よりも有意に得点が高く ($p < .05$)、6年以上10年未満の群が、2年未満、2年以上6年未満の群よりも高かった ($p < .05$)。すなわち、2年未満の群から2年以上6年未満の群にかけて有意な得点の差はみられないが、6年以上10年未満の群で有意に得点が増加し、以降の群で有意差はないものの得点が増加していくことが示された。

また、臨床経験年数による各因子の平均得点を比較した (Table7)。「解説」因子については、有意な臨床経験年数の主効果が得られた。

多重比較を行ったところ、20年以上の群が、10年以上20年未満の群を除く3群よりも高かった ($p < .05$)。また、10年以上20年未満の群と6年以上10年未満の群は2年未満・2年以上6年未満よりも高く、2年以上6年未満の群は2年未満よりも高かった (いずれも $p < .05$)。すなわち、2年未満の群から6年以上10年未満の群まで有意に得点が増加し、以降の20年以上の群でさらに有意に上昇することが示された。「共有」因子については、有意な臨床経験年数の主効果が得られた。多重比較を行ったところ、20年以上の群と10年以上20年未満の群が、2年未満の群に比べて有意に高く、2年以上6年未満の群が2年未満と6年以上10年未満の群よりも有意に高い得点を示した (いずれも $p < .05$)。2年以上6年未満の群で有意に上昇を示した後、6年以上10年未満の群で有意に得点が増加し、経験年数を経るごとに上昇を示す傾向がみられた。「同調」因子についても、有意な臨床経験年数の主効果が得られた。多重比較を行ったところ、20年以上の群は2年未満・2年以上6年未満・6年以上10年未満よりも高く、10

Table 7 臨床経験年数によるセラピストの情動調律性尺度得点および下位尺度得点と分散分析結果

	2年未満	2年以上6年未満	6年以上10年未満	10年以上20年未満	20年以上	F
セラピストの情動調律性	48.11 (13.35)	53.77 (13.51)	64.68 (11.99)	72.58 (9.05)	83.56 (5.64)	25.71 ***
「解説」	2.61 (.76)	3.11 (.87)	3.74 (.49)	4.00 (.45)	4.59 (.28)	27.39 ***
「共有」	3.11 (.90)	3.90 (.75)	3.38 (.76)	3.74 (.61)	4.11 (.55)	6.09 ***
「同調」	2.27 (.89)	2.25 (.91)	3.15 (.98)	3.70 (.79)	4.35 (.44)	19.36 ***

上段：平均値，下段：標準偏差

*** $p < .001$

Table 8 臨床経験年数と主理論による下位尺度得点の分散分析結果

	2年以上6年未満			6年以上10年未満			10年以上			主効果		交互作用
	力動 (N=12)	人間性 (N=10)	認知・行動 (N=6)	力動 (N=20)	人間性 (N=12)	認知・行動 (N=8)	力動 (N=13)	人間性 (N=9)	認知・行動 (N=11)	年数	主理論	
「解説」	3.23 (.92)	3.00 (.94)	3.17 (.98)	3.64 (.48)	3.68 (.51)	4.02 (.43)	4.05 (.41)	4.42 (.42)	4.08 (.58)	19.74 ***	.26	1.12
「共有」	4.08 (.79)	3.70 (.67)	3.83 (.98)	3.35 (.74)	3.13 (.66)	3.38 (.89)	3.92 (.61)	3.89 (.76)	3.70 (.50)	3.54 *	.88	1.25
「同調」	2.77 (1.06)	1.94 (.69)	1.83 (.75)	3.21 (.95)	2.95 (.94)	3.46 (1.16)	3.83 (.74)	3.80 (.93)	4.00 (.68)	25.66 ***	1.50	1.38

上段：平均値，下段：標準偏差

* $p < .05$ *** $p < .001$

年以上20年未満の群と6年以上10年未満の群は2年未満・2年以上6年未満よりも高かった(いずれも $p < .05$)。すなわち、臨床経験6年以上10年未満の群から得点が上昇していく傾向が示された。

3) Th.の情動調律性に対する臨床経験年数と主理論の効果 下位尺度得点ごとに経験年数の違いによって、主理論の効果が異なるかを検討した(Table 8)。

「解説」因子については、臨床経験年数と主理論に交互作用が認められなかったため、主効果を検定したところ、臨床経験年数のみ有意であった($F(2,92) = 19.74, p < .001$)。多重比較の結果、2年以上6年未満 < 6年以上10年未満 < 10年以上という結果となった($p < .05$)。「共有」因子に関しては、臨床経験年数と主理論に交互作用が認められなかったため、主効果を検定したところ、臨床経験年数のみ有意であった($F(2,92) = 3.34, p < .05$)。多重比較の結果、2年以上6年未満 = 10年以上 > 6年以上10年未満という結果となった($p < .05$)。「同調」因子についても、臨床経験年数と主理論に交互作用が認められず、臨床経験年数に有意な主効果がみられた($F(2,92) = 25.67, p < .001$)。多重比較の結果、2年以上6年未満 < 6年以上10年未満 < 10年以上という結果となった($p < .005$)。

考察

1) 経験年数ごとのTh.の情動調律性尺度得点の比較 経験年数ごとの尺度得点を比較したところ、6年以上10年未満の群まで有意に得点が上昇していき、以降の群で有意差はないものの得点が上昇していくことが示された。すなわち、Th.の情動調律性は、臨床経験中期ごろから徐々に発達していくことが考えられる。この結果は、経験年数を積んだTh.の方がCl.の語りの内容と同時に、非言語的要素への注目度合いが高くなるとするWestland (2015)の見解と一致するものである。内海・小田(1998)は、臨床経験の浅い初心者の特徴を、考えや態度の「硬さ」というキーワードで表現できると述べているが、臨床経験6年未満の初心者群では、

Cl.の非言語的要素よりも、Cl.の語りの内容といったより明確に捉えやすい要素への注目度が高くなりやすいと考えられる。また、情動調律に近い事象として、鯨岡(2006)は、「成り込み」という概念を用いてTh.-Cl.間の情動共有状態を説明している。Th.という主観において、Cl.の主観のある状態が分かる、相手に浸透している生氣衝動vitality affectsがこちらに伝わり、私の主観の中にある感じ(つまり何らかの生氣衝動vitality affects)が自ずと喚起されるというものである。熟達したTh.は、初心者のTh.と比較して、情動調律性を活かすことでCl.との関係性の促進と維持を図っているのではないだろうか。

2) 経験年数によるTh.の情動調律性尺度の各因子得点の比較 経験年数による下位尺度得点を比較したところ、「解説」因子については、2年未満の群から6年以上10年未満の群まで有意に得点が上昇していき、以降の20年以上の群でさらに有意に上昇することが示された。臨床経験10年まで線形的に得点が上昇していくこと、「共有」因子については臨床経験2年以上6年未満の群で上昇を示した後、6年以上10年未満の群で得点が下降し、経験年数を経るごとにゆるやかに上昇を示す傾向があること、「同調」因子については、臨床経験6年以上10年未満の群から得点が上昇していく傾向が示された。

「解説」因子は、Cl.の感情や状態を非言語的にTh.が読み取ろうとする態度を示している。Cl.の非言語的要素に注目することは、学派や理論を越えて常識となっており、心理臨床の学び始めからTh.にある程度備わっている態度だと思われるが、臨床経験を積み重ねるごとに、重要視される度合いが高くなることが明らかとなった。Stern(1985)は、間主観的なかわり合いにおいて、話し方、表情、目つき、身体の動かし方など、ノンバーバルな重層的コミュニケーションの重要性を述べている。そうしたCl.の感情や状態を非言語的に読み取ろうとする態度は、心理臨床の経験知として徐々に内在化されていくのではないだろうか。

「同調」因子は、Th.とCl.の一体感を感じとる

態度を示しているが、臨床経験中期（6年以上10年未満）から、Cl.の行動やリズムなどへの同調が意識されやすいことが示された。Hoffman（1984）は乳児の同調行動に関する研究から非言語的コミュニケーションの同調が相互交流を成立させるための条件の1つであるとしている。また、Bernieri（1988）は、心理臨床におけるラポールの問題に関して、「高いラポール状態はしばしば調和的である、スムーズである、調和している、あるいは同じ波長である」といった言葉で記述される。同様に、低いラポール状態はぎこちない、ずれている、いっしょでない、といった言葉で記述される」と述べている。よって、より熟達したTh.は、「同調」機能を発揮することでCl.理解やラポール構築に努めていることが推測される。医学領域における臨床能力の熟達化に関する研究で、Schmidt, Boshuizen, & Hobus（1988）は、教科書的な医学知識の利用と経験年数との間には、逆U字型の現象がみらえることを明らかにしている。心理臨床とは異なる領域ではあるが、この知見をもとにすると、比較的初心者の群（2年未満・2年以上6年未満）で、得点が低かったのは、教科書的な傾聴やTh.の態度が重視され、Cl.の非言語要素への同調に意識が向いていないことを示しているのかもしれない。

「共有」因子は、Th.がCl.の感情や状態を分かち合おうとする態度を示している。新保（2004）は、初心者Th.の特徴としてCl.の語りのコンテキスト理解、すなわち情報の把握が優先されると述べている。さらに、Th.の熟達とは、Cl.理解が意識レベルから深層レベルへ自動化される過程であるとしている。これに照らして考えると、臨床経験2年以上6年未満という時期は、心理臨床の訓練を一通り終え、Th.として相応しい態度を学修して現場に出ていく時期と想定され、Cl.の情動の「共有」に専念しようとする態度が増加すると考えられる。その後の中期群（6年以上10年未満）で、「共有」の割合が減少するが、中長期群（10年以上20年未満）から長期群（20年以上）で再び増加することから、Cl.と感情を分かち合おうとする態度が特化されていく過程が想定される。また、臨床経験中期は、扱うケース内容の多様化や転職

などによる臨床領域の変化を経験しやすい時期とも考えられるため、それらの影響を加味した詳しい検討が今後必要である。

まとめとして、Rumelhart & Norman（1978）の学習の過程理論を参考に、情動調律性の発達過程について考察すれば、臨床経験を経るごとに、Th.はCl.理解のパターンを徐々に積み重ねていき、獲得したパターンが適切であれば、それが促進されていく。一般化や特殊化を繰り返しながら、自分なりのパターンを構築し、より正確にCl.の非言語的要素の「解読」、「共有」、「同調」を行っていくと考えられる。長期群（20年以上）の全体的な得点の高さは、それらが自然な状態として内在化された状態を示していると言えるのではないだろうか。

3) Th.の情動調律性に対する臨床経験年数と主理論の効果について Th.の情動調律性尺度の各下位尺度得点に対する臨床経験年数と主理論の効果をもとめると、いずれの下位因子においても、Th.のよって立つ臨床心理学的理論にかかわらず、臨床経験年数がTh.の情動調律性に効果をおよぼしていることが明らかとなった。

「解読」因子と「同調」因子については、心理臨床経験を重ねていくにしたがって得点が上昇していく結果となった。このことは、Fiedler（1950）は、異なった技法を用いても、経験を積んだTh.同士は理想的な治療関係の特徴について一致した意見をもっており、経験を重ねることにより、それぞれの技法を超えて、理想的な治療関係について同一の結論に至るという意見と一致するものである。「共有」因子については、心理臨床初期から中期に差しかかったところで得点が下降し、再び長期で上昇するという結果となった。これは、先に述べたように、「共有」というTh.の態度が、経験年数の長さに応じて一律に上昇または下降するわけではないことによるものと考えられる。

Th.が話すことや質問の内容は理論的立場や使う技法によって異なり、またCl.の状態を理解する際の切り口やその説明に常用される言語も異なる。しかし、どんなモデルが用いられるにせよ、大抵の治療プロセスの中には、絶え間

ないTh.とCl.の非言語的コミュニケーションが存在しているという共通特性がみられる(Lambert, 1992)。技法や理論は、Th.の関り方やコミュニケーションをいわば儀式化した方法であり、Th.とCl.の相互的關係性が生まれるところにしか意味をもたない(Lambert, 1992)。この視点から、非言語的にCl.の表現や状態を解説し、共有した上で、それらに波長を合わせていくというTh.の情動調律性は、心理臨床における理論や技法以前にあるTh.が身につけるべき普遍的特性や態度、あるいはメタスキルとして位置づけられるのではないだろうか。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、「Th.の情動調律性尺度」について、共感性との相関をみることに留まっており、Th.の情動調律性の特徴の一端を検討したに過ぎず、その構成概念については想定の域を出ない。尺度の妥当性も適切に検討されていないため、本研究の結果を一般化するためにはさらなる検討が必要である。さらに、本研究は、横断的な調査から経験年数の影響による変化を検討したものであるが、いくつかの限界を指摘できる。第1に、研究の精度を上げるためにより多くの対象者を確保した上で、各対象者数に繰り返し調査を行う縦断的データが必要である点、第2に得られた結果の中から、個人の性格特性や資質、受けてきた臨床教育、文化あるいは時代背景といった質的要素の影響が排除されている点が挙げられる。たとえば、同一臨床事例をもとにして、経験年数ごとあるいは、他職種の専門家とTh.の思考過程や視点の違いなどについて質的・記述的な比較研究を行うことによって、Th.の独自性や発達過程を詳細に検討できるかもしれない。第3に、本研究は対象者の自己報告に依存しており、精密にTh.の情動調律性を検討したものとは言い難い。今後は、Th.によるCl.の非言語的コミュニケーションの読み取りやその活用について、実験的な枠組みを設定し、Cl.による面接の質の評価と絡めながら初心者と熟達者の面接過程の詳細な分析などが必要であろう。

謝辞

本研究に係る調査にご協力いただきましたすべての臨床家の皆様に、記して深謝申し上げます。

【引用文献】

- Auerbach, A.H. & Johnson, M. (1977). Research on the therapist's level of experience. In A.S. Gurman and A.M. Razin(Eds.), *Effective Psychotherapy: A Handbook of Research*. New York : Pergamon.
- Beebe, B. & Latchman, F.M. (2002) *Infant Research and Adult Treatment: Co-constructing Interaction*. The Analytic Press, Inc. (富樫公一(監訳)(2008) 乳幼児研究と成人の精神分析：共構築され続ける相互交流の理論. 誠信書房)
- Bernieri, F.J. (1988) Coordinating movement and rapport in teacher student interactions. *Journal Nonverbal Behavior*, **12**(2), 120-138
- Buie, D.H. (1981) Empathy: Its nature & limitation. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **29**, 281-307.
- Convington, C. (1991) Infant observation reviewed. *Journal of Analytic Psychology*, **36**, 63-76
- Fiedler, F.E. (1950) The concept of the ideal relationship. *Journal of Counseling Psychology*, **14**, 239-245.
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦(2008) 共感性プロセス尺度作成の試み. 筑波大学心理学研究, **36**, 39-48
- 弘中正美(2008) 遊戯療法における実践的理論構築の試み. 明治大学心理社会学研究, **3**, 48-58.
- Hoffman, M. (1984) *Interaction of affect and contagion in empathy*. Cambridge University Press.
- 神田橋條治 1997 初心者への手引き 花クリニック神田橋研究会
- 葛西真記子(2005)「カウンセリングの自己効力感尺度(Counselor Activity Self-Efficacy Scales)」日本語版作成の試み. 鳴門教育大学研究紀要, **20**, 61-70
- 葛西真記子(2006)セラピスト訓練における治療同盟、面接評価、応答意図に関する実証的研究. 心理臨床学研究, **24**, 87-98
- 鯨岡峻(2006)ひとがひとをわかるということ：間主観性と相互主体性. ミネルヴァ書房

- Lambert, M.J. (1992) Implication of outcome research for psychotherapy integration. In J.C.Norcross & M.R.Goldfreid (Eds), *Handbook of psychotherapy integration*. New York: Basic.
- 増田亜紀子 (1992) カウンセラーの経験年数によるクライアント理解の様式の変化 東京大学大学院教育学研究科教育心理学分野修士論文 (未公開)
- 三原亘 (1998) 共感性尺度の認知的側面に関する一研究. 性格心理学研究, **6**(2), 152-153
- Neely, M.A. (1992) *Quality interviews with adult students and trainees*. Illinois : Thomas.
- Orange, D.M. (2002). There is no outside : Empathy and authenticity in psychoanalytic process. *Psychoanalytic Psychology*, **19**, 686-700.
- Rogers,C.R. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-103
- Rumelhart,D.E. & Norman,D.A. (1978) *Accertion, tuning, and restructuring: Three modes of learning*. In J.W.Cotton & R.L.Klatsky (Eds.) Semantic factors in cognition. Hillsdale,N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Sander,L. (1995) Identity and the experience of specificity in a process of recognition. *Psychoanalytic Dialogues*, **5**, 579-693
- Schmidt, H.G., Boshuizen, H.P.A., & Hobus,P.P.M. (1988) *Transitory stages in the development of medical expertise; The "intermediate effect" in clinical case representation studies*. In proceeding of the 10th annual conference of cognitive society. Hillsdale: N.J.Erlbaum.
- 新保幸洋 (2004) カウンセラーの心理アセスメント能力の発達過程に関する研究 大正大学大学院研究論集, **28**, 256-244
- Stern, D. N. (1985) *The interpersonal world of the infant*. New York : Basic Books. (小此木啓吾・丸田俊彦 (監訳) 神庭靖子・神庭重信 (訳) (1989・1991) 乳児の対人世界: 理論編・臨床編. 岩波学術出版)
- Stern, D.N. (2004) *The present moment in psychotherapy and everyday life*. W.W.Norton. (奥寺崇(監訳) 津島豊美(訳) (2007) プレゼントモーメントー精神療法と日常生活における現在の瞬間. 岩波学術出版社)
- Stolorow, R.D., Brandchaft, B. & Atwood, G.E. (1987) *Psychoanalytic Treatment: An intersubjective approach*. The Analytic Press. (丸田俊彦 (訳) (1995) 間主観的アプローチ 岩崎学術出版)
- 鈴木有美・木野和代 (2008) 多次元共感性尺度 (MES) の作成: 自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて
- 鈴木陽子 (1995) 臨床場面における臨床家の行動特性および影響体験について: 熟練者と初心者と比較して. 名古屋大学教育学部紀要, **42**, 231-232
- Strupp, H.H. (1955) An objective comparison of Rogerian and psychoanalytic techniques. *Journal of Counseling Psychology*, **19**, 97-102
- 武島あゆみ・若杉弘子・西村良二・山本麻子・上里一郎 (1993) 精神療法における臨床経験年数と治療者の行動・態度 カウンセリング研究, **26**(2), 97-106
- The Boston Change Process Study Group (2007) The fundamental level of psychodynamic meaning : Implicit process in relation to conflict, defense and the dynamic unconscious. *International Journal of Psychoanalysis*, **88**, 843-860
- 牛津信忠 (2010) 共感的共同の現象性と基底について: 福祉実践の場についての間主観的考察. 聖学院大学論叢, **22**(2), 207-232
- 和田実 (1992) ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂. 東京学芸大学紀要(1部門), **43**, 123-136
- Westland, G. (2015) *Verbal and Non-Verbal Communication in Psychotherapy*. New York・London: W.W. Norton & Company
- Wogan, M., & Norcross, J.C. (1985) Dimensions of therapeutic skills and techniques: Empirical identification, therapist correlates, and predictive utility. *Psychotherapy*, **22**, 63-74
- 山下一夫 (1994) カウンセリングの知と心. 日本批評社

A Study Concerning Therapist's Practical Ability and the Process of Growth

—Focus on affect attunement—

Kousuke Aoyagi Mejiro University, Graduate School of Psychology
Tatsuo Sawazaki Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2018 vol.14

【Abstract】

In this study, we investigated the influence of the length psychotherapists' clinical experience and clinical theory on the affect attunability of them.

In the first analysis, 133 psychotherapists were divided into five groups by the length of clinical experience (less than 2 years / 2 – 5 years / 6 – 9 years / 10 – 19 years / more than 20 years). Main findings were follows : (1) As a result of factor analysis, the three factor of affect attunement were extracted. Each factor was named as follows : “decoding” , “sharing” and “entrainment”. (2) The therapists' affect attunability increased from the group with clinical experience of 6 – 9 years. (3) “Decoding factor” showed a linear increase up to the clinical experience more than 10 years. (4) "Sharing factor” showed a rise in the group with clinical experience 2 – 5 years, then the score significantly decreased in the group of 6 – 9 years, and showed a gradual increase with the years of experience . (5) “Entrainment factor” showed a rise from the group with clinical experience of 6 – 9 years.

In the second analysis, 101 psychotherapists were divide into three groups by the length of clinical experience (2 – 5 years / 6 – 9 years / more than 10 years) and the clinical theory they used (Psychodynamic approach / Humanistic approach / Cognitive behavioral approach). As a result, regardless of the clinical theory, in any factor, the length psychotherapists' clinical experience had an effect on the affect atunability.

keywords : therapist's practical ability, clinical experience, clinical theory,
process of growth, affect attunement